

研 究 紀 要

第 58 号

令和四年度

奈良工業高等専門学校

目 次

論文

宗祇独吟「月の秋」百韻注解	勢田 勝郭	1
---------------------	-------------	---

宗祇独吟「月の秋」百韻去嫌一覧（Ⅱ）

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	積	人	名	衣	時	夜	風	聞
三 表	51	しくそてに くもこすみねの ゆふまくれ			旅				山				聳					衣	夕				
	52	みやこのほかそ ゆくそらもなき			旅																		
	53	かけよりも はなれぬともに わかれきて															人						
	54	みにしたかふは なみたなりけり		涙													人						
	55	みみたにも あきらかならぬ おいはうし				述																	
	56	こゑなへたてそ このりのには									×					積							聞
	57	みちとほき しかのそのふの あとふりて						×								積							
	58	わけしひとなき さとのつゆけさ	秋								居	降					人						
	59	たかそてを しのひて つき の のこるらむ	秋	月										光			人	衣		夜			
	60	しのめふかき きぬきぬのあき	秋		恋														△	夜			
三 裏	61	あさかほに うつしころの いろをみて	秋		恋		草																
	62	ひとひのゆめの みをなおもひそ		夢		述								□			人				×		
	63	よのなかは きふもむなし あすもなし				述																	
	64	いくたひかはる ふちせなるらむ								水													
	65	なかれきは とまりもあへす またうきて					×			水													
	66	かへるみちあれ とほきしまくに							×	×													
	67	まほろしは ひとをいつくに たつぬらむ			恋												人						
	68	ふみたにかよふ ちきりともかな			恋																		
	69	うきなかは くめのいははし すゑたえて			恋				山	×								名					
	70	かけしもよその やまのはのくも							山				聳										
三 裏	71	またさくに はなやこころを ゆつるらむ	春				木																
	72	ふかきにとりも やとるうめかか	春				木	鳥															
	73	はるさむき かきほはしにも くれはてて	春								居	降								夕			
	74	つき かすむよは かせもしつけし	春	月									聳	光						夜	風		
	75	おもかけに ねぬるをいかか みえつらむ			恋															夜			
	76	おとろくときそ みのとかをしる															人						
	77	おやをさへ とほきわかれに わすれきて															人						
	78	ひはてらせとも まよふやまみち							山					光									
名 表	79	くもうすき あきのすゑのの かたしくれ	秋									降	聳										
	80	やととふゆふへ うつらなくなり	秋		旅			鳥												夕			
	81	ゆくそての なみたのちはら いろつきて	秋	涙			草												衣				
	82	みにしむ つき に かへるさのそら	秋	月	恋									光			人			夜			
	83	うきひとの こころのあらし ふきすてよ			恋												人				□		
	84	ゆき たにみちを のこすたにのと	冬						山		□	降											
	85	ひむろやま をさまれるよの あとふりて							山									名					
	86	たかつのみやの むかしならはや				述												名					
	87	たてかぬる しつかけふりを たれかみむ		煙									聳				人						
	88	こいへそさとの なかにかくるる									居												
名 裏	89	ゆふかほの はひりのきは かたふきて	夏				草				居												
	90	なつふかくなる あをやきのかけ	夏				木																
	91	わたりせぬ ひとふねにや すすむらむ	夏	船						水							人						
	92	あきふくかせに うかふあさかは	秋							水										朝	風		
	93	やまみつの つき のうへゆく きりはれて	秋	月					山	水		□	聳	光						夜			
	94	たちしもみえぬ しきのひとこゑ	秋					鳥															聞
	95	よそにのみ ききすくすへき あはれかは																					
	96	かきりとおもへ けふのゆふくれ																		夕			
	97	みをたのむ ひとや はな をも をしむらむ	春				木										人						
	98	かたえうちちる にはのつまなし	春				木				居												
	99	やまさとは かすみもはるの あめににて	春						山		居	降	聳										
	00	いはほのなかれ おともたえせず								水													聞

宗祇独吟「月の秋」百韻去嫌一覧 (I)

		季	七	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	積	人	名	衣	時	夜	風	聞
初表	01	つきのあき はなのはるたつ あしたかな	春	月			木							光						朝			
	02	かすみにちかき ゆきのおもかけ	春									降	聳										
	03	みつけふる みやまのこほり ひまみえて	春						山	水													
	04	ゆふかせあらき かはつらのさと								水	居									夕		風	
	05	あしそよく かけにをふねや とまるらむ		船		旅	草			水													
	06	かかれはつゆを はらふたひと	秋			旅						降					人						
	07	なくむしの こころしらるる のへにねて	秋					虫													夜		
	08	まくらすさまし ふけやはつらむ	秋	枕																	夜		
初裏	09	ゆくつきも とほききぬたの のこるよに	秋	月										光				□		夜			
	10	つらきかせとふ やまとのいほ							山		居											風	
	11	おいきこそ なほわかともと まつをみて		松		述	木										×						
	12	くちすはいとと みをいかにせむ				述											人						
	13	おろかなる なをやとめむと なけくよに				述																	
	14	おもひもすてよ あさきことのは																					
	15	いつはりに たえぬちきりの はてもうし			恋																		
	16	かよひしひと ゆめのうきはし		夢	恋					×							人				夜		
	17	たつねみる よかはのつきの かけふけて	秋	月										光				名			夜		
	18	みねなるてらは たたあきのかせ	秋						山							積						風	
	19	しかならて おちはをわくる あともなし	秋				木	獣															
	20	かれののこかけ しもうつむころ	冬				木					降											
	21	くさむすふ あさとをさむみ ひのさして	冬			旅	×				居			光						朝			
	22	たけるましはを のこすわひと															人						
二表	23	たくはへや おもひになるを わするらむ																					
	24	みつれはかくる ことわりをしれ																					
	25	さやかなる つきもさかりの みしかよに	夏	月										光							夜		
	26	さくらかうへの あけほのいろ	春				木												△		夜		
	27	かすみより よしののみたけ かねなりて	春						山				聳				名				夜		
	28	はるをしつかに つくすおくやま	春						山														
	29	ときにあふひとやうつれは うらむらむ															人						
	30	ちきりおくこそ よははかなけれ			恋																		
	31	かせのつゆ ひかけのしもを いのちにて			恋							降		光								風	
	32	まよふころや くもきりのはて	秋									□	聳										
	33	ふるさとを そらにおもひの あきのくれ	秋			旅					居									夕			
	34	かりのなみたも なほたひのそて	秋	涙	旅		鳥											衣					
	35	まくらしく よふねのおきに つきふけて	秋	枕船月	旅					水				光							夜		
	36	しらぬやまみる なみのをちかた				旅			山	水													
二裏	37	むさしのや をはなすゑの ゆきたかみ	冬				草					降					名						
	38	いかなるかぜの またしくるらむ	冬									降										風	
	39	さためなきひとをわすれて まつくれに			恋												人			夕			
	40	けにあたりや いまはたのまし			恋																		
	41	のちのよを いのれとかみや おもふらむ												神									
	42	としはいすすの なみのはやかは				述				水							名						
	43	やままつの ももえのかけは なほふかし		松			木		山														
	44	をかへになひく はしのひとむら	秋				木		山														
	45	うすきりの ゆふひかくれに もすなきて	秋					鳥				□	聳	光						夕			
	46	きみかあたりは つゆもみまほし	秋		恋							降					人						
	47	いててこそ とふをもしらめ かのまへ			恋						居												
	48	かせにまきるる よはのおとつれ			恋																夜	風	
	49	たまあられ まくらのつきに またちりて	冬	枕月	恋							降		光							夜		
	50	やまちなしき ささのかりふし			旅		竹		山												夜		

特に向こう岸に渡る用のない人も、納涼のために乗っていることだろう。

渡りせぬ人も船にや涼むらむ

92 秋吹く風に浮かぶ朝川

《解釈》初秋の川辺の朝、風が涼しい。一艘の船が浮かんでいるが、その船には、特に向こう岸に渡る用のない人も、納涼のために乗っていることだろう。

※「船」に「浮かぶ」が寄合。先例は「むかふ波あとになりつる沖つ船／青海原に浮かぶ大空」(文安月千句・第五「何路」六三／六四)など。ただし「船」に「浮かぶ」は所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

秋吹く風に浮かぶ朝川

93 山水の月の上ゆく霧はれて

《解釈》霧に包まれた山の朝、水の流れの音だけが聞こえる。風が吹いて霧が払われると、今まで見えなかった川面に、まだ残っている月の浮かんでいるのが見える。

※「浮かぶ」のは、先の付合では「船」。この付合では「月」となる。所謂「体付」である。

※水辺が三句連続するので体用の沙汰が必要であるが、第九一句の「船」は体用の外であるので、問題は生じない。

山水の月の上ゆく霧はれて

94 立ちしも見えぬ鳴の一声

《解釈》山中の水の流れ、霧が晴れると、水面に月が映っているのが見える。鳴の鳴き立つ声したが、夜の闇に紛れて姿は見えない。

立ちしも見えぬ鳴の一声

95 余所にのみ聞きすぐすべきあはれかは

《解釈》どこかで鳴の鳴き立つ声したが、闇に紛れて姿は見えない。私のような者にも、本当に身にしてみても感じられる秋の情趣である。

※「立つ鳴」に「あはれ」が寄合。先例は「霧わたる田の面の末に鳴立ちて／今折からのあはれをぞ知る」(寛正七年二月四日「何人」四七／四八)など。「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」(新古今・四・三六二、西行法師)が有名。

余所にのみ聞きすぐべきあはれかは

96 かぎりと思へ今日の夕暮

《解釈》今日も夕暮になった。老い果てて明日を知らぬ命。私は今夜にも、誰にも見とられずに寂しく死んでゆくことだろう。人よ、誰か一人でもいいから、私のことを他人事と思わないで、憐れんで下さい。

かぎりと思へ今日の夕暮

97 身をたのむ人や花をも惜しむらむ

《解釈》春の夕暮、人々は散りゆく花を惜しんでいる。何故惜しむのか？ 明日も自

分は生きていて、花が残っておれば、それを明日も見ることができると思い込んでいるからではないのか？ しかし、この世は無常、人の命は明日知れぬもの。それを真実に知っている人なら、花の散るのを見ても惜しくは思わないだろう。

※『萱草』に入集(伊地知本二二三)。「老葉」に入集(宗訊筆本一七〇、毛利本一六八、筑波大学本一六八、愚句老葉二〇九)。「愚句老葉」自注は「かくれなし」、宗長注は「花に世の常なきを云ふにや」のごとくである。

身をたのむ人や花をも惜しむらむ

98 片枝うちちる庭のつま梨

《解釈》庭に植えられた梨の木の片枝の花が、はらはらと散っている。梨の実がなつたら、その実を食べようと当てにしている人は、花が散るのも、惜しいと感じるのだろうか。

※「身」を「実」に取りなした俳諧的な付合である。近代の研究者には殆ど無視されていることであるが、これも宗祇の一体として忘れてはならない付合である。

※一句の仕立ては「生の浦に片枝さしおほひ成る梨の成りも成らずも寝てかたらはむ」(古今・二〇・一〇九九、大歌所歌)を本歌とする。

片枝うちちる庭のつま梨

99 山里は霞も春の雨に似て

《解釈》それが霞に包まれた山里の庭の梨の木。片枝の花がはらはらと散っている。その様は、涙に暮れる美女に例えられた「梨の花が春の雨に濡れている姿」を彷彿させる。

※「梨」に「春の雨」が寄合。『長恨歌』に「梨花一枝春帶雨」とあるのが典拠。先例は「霞のこむるつま梨の花／人も見よわが衣手の春の雨」(宝徳四年千句・第一「何人」八二／八三)など。『長恨歌』を本説にした付合は、これで二つ目になるが、如何。

山里は霞も春の雨に似て

00 岩ほの流れ音も絶えせず

《解釈》山里の春は一面の霞で、春雨が降っているようにも感じられる。その霞の奥から、巖を流れる水の音が聞こえ、それは絶えることがない。

※霞を春雨に見まがう証歌としては「春雨は降らでもくれぬ天つ空くもると見るぞ霞なりける」(建長八年九月十三日百首歌合・一一五)が解りやすい。

※挙句は慶賀のニュアンスのある句とするのが作法。その作法どおりに百韻を終える。

身にしむ月にかへるさの空

83 憂き人の心の嵐吹きすてよ

《解釈》今夜もまた、一目逢いたいとあの人の所を訪れたけれど、逢ってはもらえなかった。あの人は、どうしてこうも私に対して、嵐のように辛く激しく当たるのだろうか。あの人の心の嵐が吹きやんでほしいと願うが、それはいつのことだろうか。帰る道すがら、月はまだ空に残り、その光は身にしみ入るようだ。

※「吹き捨てる」は、批判を承知で、(嵐が一次的に)「吹いて、(やがて)そのまま止む」という意であろうと判断した。「一むらの時雨は過ぎて吹き捨てる嵐の後に雲ぞたゞよふ」(延文百首・七五六、寛蒼)など、その例とできるのではあるまいか。如何。

憂き人の心の嵐吹きすてよ

84 雪だに道を残す谷の戸

《解釈》世は乱れ、人の心中には辛く激しい嵐が吹き荒れている。賢人はそれを厭って世を避けて山に入るが、いつか穏やかな世となり世に戻ることを願っていることだろう。それを知ってか知らずか、雪までもが、谷の入り口の道を埋め尽くさずにいるようだ。

※「憂き人の心」を乱世の人心に取りなし、句境を「恋」から転じた付合として解釈した。如何。賢人は、乱世には世を通れ、治まれば世に帰るといのは、特に典拠を挙げずとも、「竹林の七賢」など、古典文学では常識とされる発想である。

雪だに道を残す谷の戸

85 氷室山をさまれる代の跡ありて

《解釈》昔、氷室が営まれた山、今でも猶その跡だけは残っている。谷の入口は雪に覆われているが、それでも、氷室への道はたどることができそうだ。まるで聖代の治世を忘れるなど言うかのようなのである。

※「氷室山」は山城国の名所。『延喜式』には、山城国内に六か所の地名が挙げられているが、連歌では「松ヶ崎」との寄合で用いられることが多い。それは、今の京都市左京区上高野氷室山である。「吹き越ゆる高根おろしの松が崎／氷室守るてふ袖の寒けさ」(文安雪千句・第一「何路」八一／八二)など。

※「雪」に「氷室」が寄合。先例は「踏みわけていや固まれる雪の上／これや守るてふ氷室なるらむ」(文安四年九月六日「山何」八七／八八)など。

※「氷室」は夏季だが、名所の「氷室山」は無季。従って、第八九句と指合にならない。

氷室山をさまれる代の跡ありて

86 高津の宮の昔ならばや

《解釈》難波高津宮を都とした仁徳天皇の御代、世は治まり、各地の氷室から毎年氷が献上されていたと言う。この乱世、各地の氷室はただその跡を残すばかりであ

るが、昔の聖代の治世がひたすら慕わしく思われる。

※「高津の宮」は仁徳天皇が都した所。大阪市内に諸説がある。「いにしへのなにはの事を思ひ出で、高津の宮に月の澄むらむ」(金葉・二度本・三・一九七、参議師頼)など。

高津の宮の昔ならばや

87 たてかぬる賤が煙を誰か見む

《解釈》困窮した民は食べる物がなく、炊事の煙を立てることができない。難波高津の宮に都した仁徳天皇は、それを見て三年間の貢税を止めたという。しかし今、そんな民の困窮に注意を払う人は誰もいない。昔の聖代の治世が、ひたすら慕わしく思われる。

※有名な「民の竈」の説話であるので、詳細は省略する。「貢物免されて国富めるを御覧じて、高き屋にのぼりて見れば煙たつ民の竈はにぎはひにけり」(新古今・七・七〇七、仁徳天皇御製)。元来の記事は『日本書紀』仁徳天皇即位四年及び七年の条に見える。

たてかぬる賤が煙を誰か見む

88 小家ぞ里の中に隠るゝ

《解釈》里の家並に隠れた小さい家。そこに住む人は、困窮して朝夕の炊事の煙も立てかねている。そんなことに、一体誰が気付くであろうか。

小家ぞ里の中に隠るゝ

89 夕顔の這入りの軒端かたぶきて

《解釈》里の家並に隠れた小家。軒は傾き、夕顔の蔓が這入って軒端に花を咲かせている。

※「小家」と「夕顔」とが寄合。他の例は「小家の軒端煙立つなり／夕顔の色もわかれぬ黄昏に」(文禄二年五月十六日「何路」七〇／七一)など。『源氏物語』夕顔巻に「げに、いと小家がちに、むつかしげなるわたりのこの面かの面、あやしうちよろぼひて、むね／＼しからぬ軒などに這ひまつはれたるを」云々と見える。その面影である。

※「萱草」に入集する。ただし、句形は「夕顔の茂みの垣ほ」云々となっている(伊地知本三六五)。私には百韻の形の方がどうみても上出来と思われるが、如何。

夕顔の這入りの軒端かたぶきて

90 夏深くなる青柳のかげ

《解釈》家の軒は傾き、夕顔の蔓が這入って軒端に花を咲かせている。門の柳も青々と繁り、いかにも夏の風情が深い。

夏深くなる青柳のかげ

91 渡りせぬ人も船にや涼むらむ

《解釈》夏の川辺、岸の柳も青々と繁り、いかにも夏の風情が深い。その陰の船には、

のかしら。

※恋の付合として解釈したが、如何。そうすると、前後の句は明確に「恋」ではないので、「恋」が一句で捨てられていることになる。「恋」の一句捨ては、文龜二年の「肖柏補訂」において否定されるが、それ以前の連歌において実際どれほど徹底されていたか、現在の連歌研究は未解明である。後考を俟ちたい。

※解釈の後半、「ひよつとして、その人は、私を恋しく思っているのかしら」というのも可能かと思われ、選択に迷った。証歌としては、「男のはじめて人のもとに遣はしけるに、代はりてよめる…おぼめく誰ともなくて宵ぐに夢に見えけむ我ぞその人」(後拾遺・一一・六一一、和泉式部)が挙げられる。現代人にとって無難と思われる方を選んだ。如何。

面かげに寝ぬるをいかゞ見えつらむ

76 おどろく時ぞ身の咎をしる

《解釈》寝ている間に、ある人が夢に現れた。目が覚めて後、(その人の告げによって)自らが過去に犯した咎を、あらためて自覚するのである。

※右のように解釈しても、それだけでは何のことかよく分からないが、『源氏物語』明石巻で、主人公が、海からの嵐と雷雨に身の危険を感じていた時、ふとまどろんだ夢に故院が現れ、「これは、ただ聊かなるものの報いなり」と告げ知らせるシーンを付合にしたものであろう。如何。

おどろく時ぞ身の科をしる

77 親をさへ遠き別れに忘れ来て

《解釈》親に死別した時は悲しみにくれたが、それも次第に薄らぎ、最近では忘れ果てたように追善の供養も疎かになっている。ふとそれに気付くと、自分は来世でどれだけの不幸の罪に当たるかと思ひかかる。

※「遠き別れ」は、この付合では死別のこととして解釈される。他の例としては「なげきのみ樵るやは亡きがためならむ」遠き別れも今日の面影(永正十年七月二十九日「何船」四七/四八)が解りやすい。これは宗祇年忌の百韻である。

※『萱草』(伊地知本一四七二)に入集。また『老葉』(毛利本一四六六、宗訊筆本一五一〇、愚句老葉一七〇一)に入集。『愚句老葉』宗長注は「身のとがは親をわするゝ事なるべし」のごとくである(自注なし)。

親をさへ遠き別れに忘れ来て

78 日は照らせどもまよふ山道

《解釈》長い間、遠く別れて暮らしていると、忘れてはならない親のことも、つい忘れがちになる。子を思う親の心は、闇でなくとも迷うものだと言われるが、親を思う子の心もまた、迷うはずのない明るい山中でも道に迷うことがあるようなものだ。

※有名な和歌を媒介とした超論理的な付合なので、解釈は難しいが右のごとくとした。

ただし、付合のポイントは明瞭で、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰・一五・一一〇二、兼輔朝臣)の和歌を前提に、親子の立場を逆転して、「闇にあらねども」に対し「日は照らせども」と付けている所である。

※「親」に「まよふ」が寄合。先例は「庭の訓へや親の思ひ子／すてかぬる身こそ憂き世のまよひなれ」(応永三十年四月四日「何路」三二/三三)など。

日は照らせどもまよふ山道

79 雲薄き秋のすゑ野の片時雨

《解釈》初冬の山道、眺望のきく所で、麓の方を見る。空の雲は薄く、それを透して日差しがあるが、末野の片一方だけは時雨が降っている。あの時雨がここへ来て視界が利かなくなったら、道に迷ってしまわないだろうか。どうも気になる。

※前句は、単独では常識的な論理が通りにくい内容であるが、それを、「日は照らせども」に対して「雲薄き」、「まよふ」に対して「時雨」と対応させて論理が通るよう処理した付合である。それでいながら、語をなだらかに連ねた的確な描写の一句に仕上がっている所が、やはり宗祇の腕前である。

雲薄き秋のすゑ野の片時雨

80 宿とふタベ鶉鳴くなり

《解釈》晩秋の旅。広い野のこちらの方の空は薄雲がかかっているだけであるが、向こうの方は時雨が降っているらしい。日の暮れが近い。どこかで鶉の鳴く声が聞こえる。今宵の宿を見つけないといけないが、いい場所があるだろうか。

宿とふタベ鶉鳴くなり

81 行く袖の涙の茅原色づきて

《解釈》晩秋の旅、日の暮れが近い。どこかで鶉の鳴く声が聞こえる。今宵の宿を見つけないかならないが、今夜も野宿だろうか。旅の辛さが身に滲みる。あたりの浅茅原は紅く色づいているが、あれは、私の涙で染まったものなのだろうか。

※「涙の茅原」は、勅撰集には例を見ない表現。ただし『草根集』に「憂き身しる涙の茅原くれなゐに染めてはかへる宿の通ひ路」(七八五七)という例が存在する。脇の「霞に近き」についても同じことが言えるが、宗祇連歌の表現と『草根集』あるいは冷泉派の和歌との関係について、注目されるべき現象であると私は考える。

※茅原が色づくのは、涙が「血の涙」だからである。近代のリアリズムではあり得ない表現であるが、「血の涙落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ」(古今・一六・八三〇、素性法師)の歌がよく知られている。若い人のため。

行く袖の涙の茅原色づきて

82 身にしむ月にかへるさの空

《解釈》あの人と別れて帰る道を行く。月はまだ空に残り、その光は身にしみ入るようだ。別れのつらさに私の袖は涙でびしょ濡れだ。あたりの浅茅原は紅く色づいているが、ひよつとしてそれは、私の涙で染まったものなのだろうか。

流れ木はとまりもあへずまた浮きて

66 かへる道あれ遠き島国

《解釈》罪を得て、遠く離れたこの島国に沈淪の身の上であるが、このままではいたくない。いつか都に帰り、どうかしてもう一度浮かばれたいものだ。

※前句の「流れ木」は、先の付合では通常の流水のことであったが、流人のことに取られた付合である。「流れ木も三年ありてはあひ見てむ世の憂きことぞ返らざりける」(拾遺・八・四八〇、贈太政大臣)など。流刑の期間は三年が原則であった。

かへる道あれ遠き島国

67 まぼろしは人をいづくに尋ねらむ

《解釈》恋しい人の魂の行方を求めて、道士は術を用いて尋ねまわる。その人(の魂)は、遠い島国(海上の仙山)にいた。この世に呼び返したいと思うが、その術はないのだ。

※前句の「島国」は、先の付合では流刑先の島国であったが、『長恨歌』に見える「海上の仙山」に取りなした付合である。「遂教方士殷勤覓／排空馭氣奔如電／昇天入地求之遍／上窮碧落下黄泉／兩處茫茫皆不見／忽聞海上有仙山」云々と見える。

まぼろしは人をいづくに尋ねらむ

68 文だにかよふ契りともがな

《解釈》道士の術で、あの人の行方を探し求める。あの人はどこにいるのか。現実に出会うことは適わずとも、せめて、文のやりとりができるような、前世からの約束の二人の関係であればと思う。

文だにかよふ契りともがな

69 憂き中は久米の岩橋すゑたえて

《解釈》昔、一言主神が葛城山から吉野山に橋を架けようとして果たせなかった久米の岩橋。私たち二人の関係も、そのように中が絶えてしまった。しかし、私は今もあなたが恋しい。現実に出会うことはもう適わずとも、せめて、文のやりとりができるような、そんな前世からの約束の二人の関係であればと思うが、多分それも無理だろう。

※「久米」は大和国の名所、橿原市久米町。「久米の岩橋」は「久米路の橋」「葛城の橋」、単に「岩橋」とも呼ばれる。「葛城や久米路の橋にあらばこそ思ふ心を空中にせめ」(後撰・一一・七七四、よみ人しらず)など。連歌の例は「葛城や雲のよそ目に霞むらむ／渡しもはてぬ久米の岩橋」(応永三十一年正月二十五日「唐何」一七／一八)など。水辺として取り扱われないので、第六五句の「流れ木」と指合にならない。

※「文」に「踏み」を利かせて、それと「岩」が寄合となる。他の例は「妹背の山はふみ絶えぬ道／落ちたぎつ苔むす岩もあとありて」(伊庭千句・第六「何人」五八／五九)など。

憂き中は久米の岩橋すゑたえて

70 かけしも余所の山の端の雲

《解釈》昔、一言主神が葛城山から吉野山に橋を架けようとして果たせなかった久米の岩橋。私たち二人の関係も中が絶えてしまった。私が思いを掛けたあの人は、その山の端にかかった雲のように、遠い存在なのだ。

※「かく」は、「橋を架く」「思ひを掛く」「山の端に雲懸く」の三つに利かされているとして解釈した。如何。

※「橋」に「かく」が寄合。他の例は「いつまでの川辺の橋の朽ちぬらむ／思ひを遠くかけし愚かさ」(葉守千句・第四「薄何」五九／六〇)など多い。ただし「橋」に「かく」と付けるのは所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

かけしも余所の山の端の雲

71 また咲くに花や心をゆづらむ

《解釈》遠くの山の端、また花が散り残っているようだ。もう花の時節は過ぎたはずなのにと思つて、よく見ると、やはり花ではなく、峰にかかった雲であった。花は、来年また咲くまでの間だと思つて、雲に立場を譲った気持ちでいるのだろうか。

また咲くに花や心をゆづらむ

72 深きに鳥も宿る梅が香

《解釈》春になると、早速に梅が深い香りを放ちはじめ、鳥が宿りを求めてやって来る。桜の花はまだ咲かない。桜は、間もなく自分がまた咲くまでの間だと思つて、梅に立場を譲った気持ちでいるのだろうか。

深きに鳥も宿る梅が香

73 春寒き塙ほは霜に暮れはて

《解釈》春となったが、寒さはまだ厳しい。それでも、梅の花は深い香りを放っている。もうすっかり暗くなり、塙には霜が下りているが、その香りに誘われて、鳥は宿りを求めてやって来る。

※「梅」と「塙ほ」が寄合。他に「梅かをる野の霜寒き頃／萌えそむる草の塙ほは色づきて」(文明十四年二月五日「何路」二／三)など多い。証歌は「山賤の園の垣ほの梅の花春知れとしも植ゑずやありけむ」(玉葉・一・七七、順徳院御製)など。

春寒き塙ほは霜に暮れはて

74 月霞む夜は風もしづけし

《解釈》春とはなったが、寒さはまだ厳しい。もうすっかり暗くなり、塙には霜が下りている。それでも、やはり春。月はおぼろに霞み、風も静かである。

月霞む夜は風もしづけし

75 面かげに寝るをいかゞ見えつらむ

《解釈》春の夜、月はおぼろに霞み、風も静かである。寝ていたら、思いがけない人の面影を夢に見た。何故だろう。ひよつとして、私は、その人に恋してしまった

めに大勢の人が行き返りしたのである。この里も、訪ねてくる人は絶え、あたりは、ただ露が置かれているばかりである」となる。あえて二案を示す。

※菩提僊那はインド出身で、天平八年渡来。天平勝宝四年、大仏開眼供養会の導師を務めた。和歌の世界では「婆羅門僧正」と呼ばれる。故郷のブツダ修行の五山にちなんで、奈良周辺の地を「忍辱山」「菩提山」「誓多林」「大慈仙」「鹿野園」と呼んだと伝えられ、全て、奈良市の現行行政地名として残っている。

わけし人なき里の露けさ

59 誰が袖をしのびて月の残るらむ

《解釈》訪ねて来る人も絶えた里、あたりは、ただ秋の露が置かれているばかりである。夜も更けたが、空にはまだ月が残っている。あの月は、一体、この里に住んでいた誰を偲んでいるのだろうか。

誰が袖をしのびて月の残るらむ

60 しのもめ深きぬぐの秋

《解釈》秋の夜長、ようやく東の空がほのかに明るみはじめたが、猶、夜の闇は深い。私は暗いうちに去っていったあの人のことを偲ぶ。空にはまだ月が残っている。あの月は、一体、誰を偲んでいるのだろうか。

※「しのもめ深きぬぐの秋」という言葉の連鎖が見事。「しのもめ深き」も「きぬぐの秋」も、和歌には例が検出されない措辞である。宗祇連歌の表現のレベルが如実に知れるものであろう。前句との関係もよく、私には素晴らしい付合のように感じられるが、自撰句集に入集しないのは、宗祇にとっては「並の上」程度ということなのだろうか。

しのもめ深きぬぐの秋

61 僅にうつし心の色を見て

《解釈》秋の夜長、ようやく東の空がほのかに明るみはじめたが、猶、夜の闇は深い。あの人は、どうしてこんなに暗いうちに去っていったのだろうか。あの人の本当の心は、もう私以外の女性に移ってしまっているのだろうか。傍らに僅の花が咲いている。この花は今日のうちに萎れてしまう。あの人の私に対する心も、今日のうちに萎れてしまうかも知れない。

※論理の通った解釈が非常に難しい付合であるが、言葉を補って右のごとくである。「うつし心」は「現し心」であるが、「移し」が利かされている。類例は「覚えてけりうつし心の夜の夢／別れし月に残る枕香」（顕証院会千句・第一「何船」三一／三二）など。この場合、「うつし心」に「移し」が利かされ、それが「枕香」と寄合になっている。和歌でよく用いられる「月草のうつし心」というレトリックも同じである。如何。

僅にうつし心の色を見て

62 一日の夢の身をな思ひそ

《解釈》朝顔の花が美しく咲いている。しかし、所詮一日のこと。日が出ると、もう移ろいはじめていくようだ。人の身も、同じように短く夢のように当てにならないもの。それを、あれこれ思い悩んでも仕方がない。

※「僅」と「一日」とが寄合。先例は「僅は花にあだなる名をとめて／一日添ふとも情けあれかし」（応永二十八年二月二十五日「何船」四三／四四）など。証歌は「おのづから一日をおのが盛りとやかげに隠れて残る僅」（為家五社百首・三三）など。

※「夢の身」の「夢」は比喩の「夢」であるので、夜分として取り扱われない。従って、第六〇句の「しのもめ」「きぬぐ」と指合にならない。

一日の夢の身をな思ひそ

63 世の中は昨日もむなし明日もなし

《解釈》人の世の中、昨日のことはもう過ぎ去ったものだから、今更どうしようもない。思い返しても空しいだけ。明日のことは、全く予測がつかない。自身がもう死んでいるかも知れないのだ。人生は、ある日見た夢のように実体がなく、当てにならないもの。そう悟ってしまえば、もう醒醒する必要はない。

※「萱草」（伊地知本一四〇〇）及び『老葉』（毛利本一三三二、宗祇筆本一三八六、愚句老葉一五六五）に入集。『愚句老葉』では「一句の仕立、少し心侍らんや」（自注）、二句の作、珍重／＼（宗長注）と注されている。

世の中は昨日もむなし明日もなし

64 幾度かはる淵瀬なるらむ

《解釈》人の世の中、昨日のことはもう過ぎ去ったものだから、今更どうしようもない。思い返しても空しいだけ。明日のことは、全く予測がつかない。自身がもう死んでいるかも知れないのだ。ただし、時日の経過は止まることがない。それは、川が、何度も淵になったり瀬になったりしながら、流れて止まないのとよく似ている。

※「昨日・明日」に対して「淵瀬」と付けている。「世の中は何か常なる明日香川きのふの淵ぞ今日は瀬になる」（古今・一八・九三三、読人しらす）が有名。「世」と「淵瀬」も寄合となる。例は「かはりゆく世や昨日なるらむ／淵を瀬になす人もがな涙川」（竹林抄・六・九〇九、宗砌法師）など。

幾度かはる淵瀬なるらむ

65 流れ木はとまりもあへずまた浮きて

《解釈》山から流れ落ちる川。流木は、瀬になると、波に隠れて速く流れ、淵になると、また水面に出てゆつくりと流れる。そんなことを何度も繰り返しながら、しかし、流れが止まることはないのだ。

※「淵瀬」に「流る」が寄合。先例は「たのまずよ人は淵瀬の飛鳥川／流れてはやく立つ名うらめし」（初瀬千句・第七「何人」四一／四二）など。ただし、「淵瀬」に「流れ」と付けるのは所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

風にまぎるる夜半のおとつれ 49 玉霞枕の月にまた散りて

《解釈》いくら待っても、あなたは来ない。私の枕は涙に濡れ、それに寒々とした冬の月影が宿る。風に紛れて誰かが門の戸を敲くような音が聞こえた。一瞬あの人かと期待するが、それは霰の玉が戸を打つただけのことだったのだ。

※「枕の月」は、枕が濡れて、それに月が映ずるという表現。勿論、近代のリアリズムではありえないものであるが「床の霜枕の月の寒き夜にたへずや人の衣うつらむ」(新拾遺・一八・一六五九、法印仲頼)などと用いられる。特に冷泉派に好まれたように『耕雲百首』『草根集』『為尹千首』などから例がかなりの数検出される(例示省略)。

玉霞枕の月にまた散りて

50 山路かなしき笹の仮ふし

《解釈》冬の旅。山中で一夜を過ごすことになってしまった。少しでも風を防ごうと笹群の陰に枕をとるが、寒さで眠れそうにない。情けなくて涙がこぼれ、枕を濡らし、それに月影が宿る。一度は止んでいた霰が、また降ってきた。

※「霰」に「笹」が寄合。先例は「霰の庭ぞ玉を敷きたる／山里の小笹を分くる道細し」(応永三十一年九月二十七日「何船」二二／二三)など。証歌は「笹の葉に霰ふる夜の寒けきにひとり寝なむもの」とや思ふ」(千載・一五・九五七、馬内侍)など。

山路かなしき笹の仮ふし

51 しく袖に雲越す峰の夕ま暮

《解釈》山路を行くうちに夕暮となつてしまった。雲は峰を越えて行くが、日没までに私があふ峰を越すことは不可能だろう。仕方がない。情けないが、今宵はあそここの笹群の陰で一夜を過ごすことにしよう。

しく袖に雲越す峰の夕ま暮

52 都のほかぞ行く空もなき

《解釈》都を離れて行く旅。行く手には大空が広がっているが、都はその方向ではない。もう夕暮だ。今夜はこのあたりで宿りをとろう。峰を雲が越えて行くのが見える。都が恋しくて、私の旅ははかどらない。

※付句は「心をば都にとめて天さかる鄙の荒野に行く空もなし」(続後拾遺・九・五五八、後宇多院御製)を念頭においた仕立てであろうか。如何。

都のほかぞ行く空もなき

53 かげよりも離れぬ友に別れ来て

《解釈》身に添う影よりも常に一緒だった友と別れて、私は旅に出る。行く手には大空が広がっているが、そこはもう都ではないのだ。私の足は進まない。

かげよりも離れぬ友に別れ来て 54 身に順ふは涙なりけり

《解釈》身に添う影よりも常に一緒だった友と別れてきた。今、私といつも一緒なのは、(友との別れを惜しむ)涙ばかりである。

※「影」に「身に順ふ」と付けた所がポイント。類例として「とにかく人に順ひやすからで／憂しや思ひが影となりつゝ」(太神宮法楽千句・第五「薄何」五九／六〇)など。

身に順ふは涙なりけり

55 耳だにも明らかならぬ老は憂し

《解釈》老というのはつらいことだ。耳も聞こえなくなり、世間からは疎まれる。我が身から離れないのは、ただもう涙ばかりである。

※離別の涙を、老衰を嘆く涙に取りなして句境を見事に転じた付合であると思う。

※「順ふ」に「耳」と付けている。典拠は『論語』為政編の「六十而耳順」。

耳だにも明らかならぬ老は憂し

56 声なへだてそこの法の庭

《解釈》老いというのはつらいものだ。説法の場合に加わっても、耳が遠くなっているので声が聞こえず、教えを知ることができない。

※「耳」に「声」が寄合。他の例は「御法とて耳に触るゝもたもたれず／夕べの鐘の声の間近き」(明応五年七月二十九日「薄何」四三／四四)など。

声なへだてそこの法の庭

57 道遠き鹿の園生のあとふりて

《解釈》釈尊が最初に説法をしたのは、遠い天竺の鹿野園のこと。それは遙か昔のことだが、その教えは今も脈々と伝えられている。今日の説法の場合、どうか説法の声が、私の耳にまで届きますように……。

※「鹿の園」は天竺の鹿野園のこと。釈尊が悟りを開いて後、最初の説法を行った所と伝えられる。「法」に「鹿の園」が寄合。先例は「御法のあとを残す古寺／聞くのみを鹿のその世の行方にて」(寛正七年二月四日「何人」一八／一九)など。

道遠き鹿の園生のあとふりて

58 わけし人なき里の露けさ

《解釈》大仏開眼の導師を務めた菩提僊那(婆羅門僧正)が寺を営んだというこの鹿野園の里も、今ではその跡をとどめるのみ。遠い道を訪ねてくる人は絶え、あたりは、ただ露が置かれていくばかりである。

※古代インドの鹿野園を、奈良の鹿野園に取りなした付合として解釈した。証歌としては「鹿の園移して住める山里の籬が露に月ぞやどれる」(壬二集・一五八五)が挙げられよう。如何。なお、取りなされていないとすれば、解釈は「釈尊が最初の説法をしたという鹿野園は、今ではその跡をとどめるのみ。以前は、説法を聞いた

※前句の「今はたのまじ」の「今は」を、「後の世を祈る」ということで理屈付けている所が鮮やかである。『萱草』（伊地知本一七〇二）に入集する。

42 歳は五十鈴の波のはや川 後の世を祈れと神や思ふらむ

『解釈』伊勢の内宮へ参詣のために五十鈴川を渡る。年波の流れは、この川のように早い。私ももう五十歳。後世のことを祈りなさいと、神は思っついていらつしやることだろう。

※「歳は五十鈴の」は「歳は五十→五十鈴川」という秀句である。宗祇は応永二十八年の生まれ。この連歌の成立については、応仁二年と文明二年の両説があるが、前者であれば四十八歳、後者なら五十歳の時となる。この事実は、文明二年説を有利にするものではあるまいか。参考として言えば、「齢のみ仏に近くはやなりて」は明応八年三月二十日「何人」の第四三句。当時、宗祇は七十九歳である（釈尊の入滅は八十歳）。

※「五十鈴川」は伊勢国の名所。伊勢内宮の境内を流れる。

年は五十鈴の波のはや川

43 山松の百枝のかげはなほ深し

『解釈』伊勢の内宮へ参詣のために、五十鈴川を渡る。私も五十歳になった。年波の流れは、この川のように早く、返ることはない。しかし、神路山の百枝の松は、昔に変わらず深い緑の色である。

※付句は「神路山百枝の松もさらにまた幾千代君に契りおくらむ」（風雅・二〇、二一八七、土御門院小宰相）を本歌とする仕立。「神路山」は、五十鈴川の上流域の山の総称。「五十鈴」に「百枝」と付けている。

山松の百枝のかげはなほ深し

44 岡辺になびく櫓の一むら

『解釈』秋となつて、むこうの岡の辺りには、一群の櫓の木が美しく紅葉している。一方、山の松の多くの枝は、変わらず深い緑の色である。

※一句の仕立は「岡辺なる櫓の紅葉は色こくて四方の梢は露の一しほ」（風雅・七、六七五、新室町院御匣）を本歌とする。

※「百枝」に「櫓」と付けている。典拠は「あらち山時雨降るらし矢田野なる百枝の櫓は紅葉しにけり」（夫木・一五・六〇六九）であるが、調査の範囲では、これが唯一の例である。『新式』には「人のあまねく不知歌をば付合に是をこのむべからず」（本歌事）という故実がある。独吟でなければ、そう好むべきことではない。

岡辺になびく櫓の一むら

45 薄霧の夕日隠れに鵲鳴きて

『解釈』秋となつて、むこうの岡の辺りには一群の櫓の木が美しく紅葉している。空は薄霧が立ちわたり、夕日の陰で暗くなった所からは鵲の鳴き声が聞こえてくる。

※「櫓」に「鵲」が寄合。先例は「もみぢ色こき櫓の一もと／片岡の夕日がくれに鵲鳴きて」（宝徳四年千句・第六「朝何」二四／二五）など。証歌は「鵲のある櫓の立ち枝のうす紅葉誰わが宿のものと見るらむ」（金葉・二度本・三・二四三、藤原仲実朝臣）など。また「岡辺」に「夕日」が寄合。「岡辺」に「こき櫓の一むら／露やなほ夕日がくれに残るらむ」（出陣千句・第三「何袋」九六／九七）など。証歌は「寂しさの眺めはわきつ夕日さす岡辺の松の秋の初風」（壬三集・一七一）など。所謂「四手付」だが、ことさらな感じを全く感じさせずに、視覚・聴覚を融合させて情趣あふれる詩的世界を現出させる所、宗祇連歌の水準の高さである。『萱草』（伊地知本五一三）に入集。

薄霧の夕日隠れに鵲鳴きて

46 君があたりは露も見まほし

『解釈』空は薄霧が立ちわたり、夕日の陰で暗くなった所からは鵲の鳴き声が聞こえてくる。あなたのいる辺りを少しでも長く眺めていたいのだけれど、もう日没が近い。やがて何も見えなくなるのだ。

※「鵲」に「君があたり」と付けている。「春されば鵲の草茎見えずとも我は見やらむ君があたりを」（玉葉・二二・一六〇九、読人しらす）の和歌が有名。

※「岡辺」の「辺」と「あたり」が打越で用いられている。去嫌に厳しくなる後の連歌なら批判される所であるが、宗祇の連歌は比較的鷹揚である。

君があたりは露も見まほし

47 出でこそ訪ふをも知らめ門のまへ

『解釈』あなたを待ちかねて、私は門の前へ出て来ました。そして、ほんの少しの間でも、あなたのいる辺りを見たいと思って、その方角を眺めます。そこを眺めていたら、あなたがいらつしやる姿が思い浮かぶからです。

※よく知られた『伊勢物語』第二三段の高安の女のことに取りなした付合として解釈した。如何。「君があたり見つゝををらむ生駒山雲な隠しそ雨は降るとも」（新古今・一五・一三六九、読人しらす）。

出でこそ訪ふをも知らめ門のまへ

48 風にまぎるゝ夜半のおとづれ

『解釈』夜が更けて、今、あなたの家の門の前までやって来ました。人目を忍ぶので、大きな声を出すことができません。戸を叩いても、風の音が強いので紛れてしまいうすです。屋内から出て来てくれたら、私が来たことを知っていたただけのうすが……。

※前句を理屈付けた付合であるが、その理屈付け方に意外性があり、そこに俳諧的な面白みを感じられよう。これも宗祇連歌の一つの要素として重要である。なお、第二三句、第九八句も参照されたい。

朝臣) など。

※気付かなければ何でもないようだが、「雲霧のはて」というレトリックは、調査の範囲で、和歌にも連歌にも先例の見出されないものである。やはり並ではない。

まよふ心や雲霧のはて

33 ふる里を空に思ひの秋の暮

《解釈》晩秋の旅。故郷は遠い空の彼方。帰る日を思いつつ、私は猶、果てのない雲霧の中の道を迷い行くのである。

ふる里を空に思ひの秋の暮

34 雁の涙もなほ旅の袖

《解釈》晩秋、懐かしい故郷は遠い空の彼方。見上げると、雁が渡って行くのが見える。私の旅はまだ続く。何かが私の袖に降りかかる。これは、雁が落とした涙なのだろうか、それとも、私の涙なのだろうか。

※「ふる里」に「雁」が寄合。先例は「故郷の名残と思ふ峰の雲／雁も音を鳴く身は旅にあり」(紫野千句・第八「片何」一五／一六)など。証歌は「ふる里の霞とび分け行く雁は旅の空にや春をくらさむ」(拾遺・一・五六、よみ人しらず)など。

※「雁の涙」は、秋になって屋外に露が置かれるのは、空を行く雁が鳴きながら落とした涙のためだということ。「鳴きわたる雁の涙や落ちつらむもの思ふ宿の萩の上の露」(古今・四・一二二、よみ人しらず)が解りやすい。若い人のため。

雁の涙もなほ旅の袖

35 枕しく夜船の沖に月更けて

《解釈》船中旅泊。沖の空に出た月は、夜が更け行くにつれて輝きを増す。雁が鳴きながら夜空を渡ってゆくのが見える。その雁が落とした涙が、旅で濡れ萎れた私の袖に、さらに降りかかるのだ。

※「雁」に「船」が寄合。先例は「声に知られて帰る雁がね／遠浦のほに行く船はあらはれて」(応永二十七年七月二十五日「何路」一二／一三)など。「秋風に声をほにあげて来る船は天の戸わたる雁にぞありける」(古今・四・一二二、藤原菅根朝臣)の和歌が有名。また「袖」に「枕」が寄合。先例は「我が袖の雫や海となりぬらむ／知るか枕の下思ひ寝」(顕証院会千句・第三「白何」五三／五四)など(証歌省略)。

枕しく夜船の沖に月更けて

36 知らぬ山見る波の遠かた

《解釈》船中旅泊。月は、沖の方の空に、夜が更け行くにつれてますます輝きを増す。その月の光に照らされ、波の彼方に、今までに見たことのなかった山が見える。

知らぬ山見る波の遠かた

37 武蔵野や尾花がすゑの雪高み

《解釈》遙かに続く武蔵野の原。風が吹くと、一面の尾花が波のようにうねり靡き、その向こうに、今まで尾花に隠されて見えなかった遠くの雪を頂く山が、一瞬見える。

※前句の「波」を「尾花の波」に取りなした付合である。「波」に「尾花」が寄合。先例は「波の上なる夕暮の月／霜まよふ野辺は尾花や乱るらむ」(文安雪千句・第七「初何」八二／八三)など。「鶉なく真野の入江の浜風に尾花波よる秋の夕暮」(金葉・二度本・三・二三九、源俊賴朝臣)の和歌が有名。

武蔵野や尾花がすゑの雪高み

38 いかなる風のまた時雨るらむ

《解釈》時雨が降り過ぎた後の武蔵野の原。一面の枯れ立つ尾花の向こうに見える遠くの山は、雪を頂いている。次には、どんな風が時雨を運んでくるのだろうか。

いかなる風のまた時雨るらむ

39 さだめなき人を忘れて待つ暮に

《解釈》さつき時雨が通り過ぎた。時雨はさだめなく行くものだが、あの人も時雨と同じで浮わついて定まりがない。しかし、そんなことも忘れたように、この夕暮も私の心はあの人を待つ。今度はどんな風が吹いて、私の袖に涙の時雨を降らせるのだろうか。

※「時雨」に「さだめなき」と付けている。先例は「露ばかり降りこそ残れ村時雨／さだめのなきや風の浮雲」(応永二十五年二月二十三日「何人」九／一〇)など。

※「時雨」の語を、降物の時雨と涙の時雨とに重層的に用いて、不誠実な男への恋に苦しむ女性の心理を見事に表現している。用いられている語の連鎖も美しい。宗祇連歌の水準の高さがよくうかがえるであろう。『萱草』(伊地知本八八八)に入集する。

さだめなき人を忘れて待つ暮に

40 げにあだなりや今はたのまじ

《解釈》気まぐれで浮気な人だと分かっているのに、それをつい忘れて、私はあの人を待っている。しかし、いくら待っても、あの人には来ない。やはり、本当に誠意のない人なのだということが思い知らされる。もう当てにするのはやめようと思うが、果たして、私にそんなことができるのだろうか。

※「今はたのまじ」は「もう当てにしないのだ」ではない。「もう当てにしないつもりだが、でも当てにせずにはいられない」とするのが、宗祇連歌に対する正しい態度である。若い人への老婆心で述べる。

げにあだなりや今はたのまじ

41 後の世を祈れと神や思ふらむ

《解釈》この世は、何事もはかなく定めのないものだ。今さら当てにすべきではあるまい。神も、後世のことを祈れと、思っけいらっしやることだろう。

※「草むすぶ」の「草」は、先の付合では「草枕」の「草」、それが、この付合では「草庵」の「草」に取り成されている。ちよつとしたことだが、氣付けば面白い。

たける真柴を残すわび人

23 貯へや思ひになるを忘るらむ

《解釈》わび住まいの人が、くべていた柴を途中で消そうとする。多分、節約して貯えておくつもりなのだろう。しかし、そんなことに心を労するのは愚かだと思わないのだろうか。どうせ世間からも捨てられた身の上、「無一物」の生活でよいではないか。

※前句を推測的に理由づけた付合であるが、発想に意外性がある。私はそこに俳諧性を感じるのであるが、いかがであろうか。なお、第四八句、第九八句を参照されたい。

貯へや思ひになるを忘るらむ

24 満つれば欠くる理を知れ

《解釈》人はなまじ貯えがあると、それを減らすまいと心を労しがちである。いつぱいになったものは減るのが当然だという理屈を本当に知れば、悩む必要はなくなる。

※「ものは満つれば欠くるなりけり」とか「満つれば欠くるならひなりけり」とかするのが普通。それを「満つれば欠くる理を知れ」と、命令表現を用いて自戒するように仕立てる所が、いかにも宗祇流である。

満つれば欠くる理を知れ

25 さやかなる月もさかりの短夜に

《解釈》五月（陰暦）十五日の夜、澄んだ夏の月が夜空を行く。その月は、今夜、望となるが、その次の瞬間には、もう欠けはじめるのだ。それが無常のこの世の理だということを知るべきだろう。

※前句の抽象的命題を、正統的で美しい語の連鎖で見事に具象化している。『萱草』『伊地知地本三二一』、『老葉』（宗訊筆本二五四、毛利本二四八、筑波大学本二五四、愚句老葉二九九）に入集するが、それも当然であろう。上句・下句と結び付けて「さやかなる月もさかりの短夜に満つれば欠くる理を知れ」と和歌にしたら、何とも説教臭い一首でしかなくなる。連歌の魅力は何より「付合」によって生じるものであることを、現代人にもよく理解させる例の一つではあるまいか。なお『愚句老葉』自注は「こもりくのはつせの山に照る月の満欠けしてぞ人のつねなき」（万葉・七、一二七〇）を引く。

さやかなる月もさかりの短夜に

26 桜がうへの曙の色

《解釈》四月（陰暦）十五日の夜、澄んだ満月が空を行く。しかし、やはり夏の短夜、東の空はほのかに明るくなりはじめ、それにつれて、地上の桜花のまだ散り残つ

ている姿が、次第に分明になってくる。

※先の付合は五月十五日のこと。この付合では四月十五日のことになる。

桜がうへの曙の色

27 霞より吉野の御嶽鐘鳴りて

《解釈》春爛漫の吉野の山々の曙。東の方がほかに明るくなりはじめ、満開の桜が霞の中に次第に分明になってゆく。折しも、黎明を告げる寺の鐘の音が鳴り響く。※「吉野の御嶽」は、特定の山峰ではなく、奈良県吉野郡の所謂吉野山から山上が岳（天川村洞川）にかけての山々の総称である。和歌では「金の御嶽」とも呼ばれる。

※『萱草』（伊地知本二二七）に入集。また『名所句集』（静嘉堂文庫本二三）に入集。一山桜満開の吉野の春の曙の情趣を、視覚に聴覚を加えて見事に表現し得ている。

霞より吉野の御嶽鐘鳴りて

28 春をしづかにつくす奥山

《解釈》霞に包まれた晩春の吉野の奥山。静寂の中、寺の入相の鐘が鳴り響く。春は今日で尽きるのだ。

春をしづかにつくす奥山

29 時にあふ人やうつれば恨むらむ

《解釈》奥山での独居生活。春は今日、静かに尽きようとしている。時の移り変わりは、世を捨てた自分には恨んでも仕方のないことなのだが、時流に合い、我が世の春を謳歌している人なら、それを恨めしく思うことだろう。

時にあふ人やうつれば恨むらむ

30 契り置くこそ世ははかなけれ

《解釈》無常の世の中。永遠にいつまでもなどと契りを交わすことも、所詮はかないことだ。時めいている人も、いつか寵愛が他の女性に移れば、恨めしく思うことだろう。

契り置くこそ世ははかなけれ

31 風の露日かげの霜を命にて

《解釈》風が吹けば露は吹き散らされ、日に照らされれば霜は消える。人の命は不定なものなのに、永遠にいつまでもと契りを交わす。はかないことではないか。

風の露日かげの霜を命にて

32 まよふ心や雲霧のはて

《解釈》風が吹けば露は吹き散らされ、日に照らされれば霜は消える。人の命が不定なものであることは解つていても、私の心は、なお果てのない雲霧の中を迷い行くのだ。

※「霜」に「まよふ」が寄合。他の例は「隠れぬほどの霜の下草／枯るゝ野は露もやどりやまよふらむ」（永原千句・第八「山何」八二／八三）など。証歌は「霜まよふ空にしをれし雁がねの帰るつばさに春雨ぞ降る」（新古今・一・六三、藤原定家

※「老木」に「朽つ」が寄合。他の例は「あはれ老木の花は落ちにき／朽ちぬさへ柳はよき風の音」(大山祇神社法楽長祿三年千句・第九「何田」二六／二七)など。ただし「老木」に「朽つ」と付けるのは所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

朽ちずはいと身をかきむ

13 愚かなる名をやとめむと嘆く世に

《解釈》恥多き人生。これ以上生きながらえたとしても、ただ恥を重ねて、愚か者としての名を世に残すだけだろう。早く死んでしまいたい。我が身をどうしようという思いがつのるばかりだ。

愚かなる名をやとめむと嘆く世に

14 思ひもすてよ浅きことの葉

《解釈》和歌の道に志したものの、全く上達しない。このままでは、ただ下手な歌よみと言われておわるだけ。いつまでたっても上手な歌が詠めないのなら、歌道への執着はいつそきっぱりと断ち切るべきだ。

思ひもすてよ浅きことの葉

15 偽りにたえぬ契りのはても憂し

《解釈》「必ず」と言ったのに、あの人は昨夜も来なかった。けれど、あの人のことだから、思い出したように、うわべばかりの言い訳をして、また私の所にやって来ることでしよう。そんなことが、今まで何度あったことか。そんな不実な人をいつまでも頼りにするより、いつそきっぱりと関係を断ち切る方がよいのかも知れません。

※「浅きことの葉」を男の不誠実な約束に取りなして、句境を恋に鮮やかに転じている。

※「偽りにたえぬ契の果」という表現がやはり絶品。それを「も憂し」と端的な心情表現で締めくくる。いかにも宗祇と思わせる仕上がりとなっている。これに先立つ『熊野千句』第五「何路」には「偽りに絶えぬ契りになりけり」という類似の句が見える。作者は七賢の一人である行助だが、レベルの差は歴然であろう。

偽りにたえぬ契りのはても憂し

16 かよひし人も夢のうき橋

《解釈》もうずっとあの人は私に会いに来てくれない。いつまでもと誓ったあの人のことばは、偽りだったのだ。けれど、私はあの人を頼って生きることしか出来ない。私はこれからどうなるのだろうか。昔、あの人が毎夜のように通ってきてくれたいたのは、あれは夢だったのだろうか。

かよひし人も夢のうき橋

17 尋ね見る横川の月のかげ更けて

《解釈》以前、通った女性の行方を尋ねて、私はこの横河にやってきた。夜が更けて、月の光が皓々とあたりを照らしている。全てが夢の世界であつたかのような気が

する。

※前句の「かよひし人」は、この付合では「私が過去に行き通った所の人」となる。※勿論『源氏物語』夢浮橋巻の面影である。前句の「かよひし人」は浮舟、尋ねる人は薫である。巻の冒頭に「山におはして、例せさせ給ふやうに、経・仏など供養せさせ給ふ。またの日は、横川におはしたれば」云々とある。

尋ね見る横川の月のかげ更けて

18 峰なる寺はたゞ秋の風

《解釈》横河の峰の寺を尋ねてやって来た。夜が更けて、月の光が皓々とあたりを照らし、秋風が吹き過ぎるばかりである。

峰なる寺はたゞ秋の風

19 鹿ならで落葉をわくる跡もなし

《解釈》秋風の吹く峰の寺。人影は見えず、落葉のつもった道を分けて行くのは、ただ鹿ばかりである。

鹿ならで落葉をわくる跡もなし

20 枯野の木かけ霜うづむ頃

《解釈》冬の枯野。木陰には落葉がたまり、それが一面の霜に覆われ、鹿の足跡だけが点々と残されている。

※「落葉」に「霜」が寄合。他の例は「水草ある流れに秋の落葉して／霜に鳴たつ暮のさびしさ」(三島千句・第二「何船」七五／七六)など、いかにも宗祇好みである。

枯野の木かけ霜うづむ頃

21 草むすぶ朝戸を寒み日のさして

《解釈》冬の朝、旅宿を出る。外の寒さは厳しいが、それでも日は射している。その日射しで枯野の霜は解けはじめているが、日の当たらない木陰は、まだ霜に覆われたままだ。

※「朝戸を寒み日のさして」ということで、前句の「木かけ霜うづむ」を見事に処理している。「草むすぶ朝戸あくれれば日を寒み」などと付けるのが凡庸の技。ちよつとした違いのようでも、実は大差であることに、若い人は気づいてほしい。やはり宗祇。

※「草むすぶ」は、旅中だということをいう表現で、具体的に植物の「草」を結ぶことではないので、植物として取り扱われない(「草枕」も同じ)。従って、植物は第一九句(落葉・第二〇句(木かけ))の二句で棄てられており、指合は生じていない。

草むすぶ朝戸を寒み日のさして

22 たける真柴を残すわび人

《解釈》侘人の住む茅屋。朝になって、戸を開ける。外の寒さは厳しいが、それでも日は射している。もうこれ以上寒くなることはないだろうと、くべていた柴を消すのだ。

ろう。

霞に近き雪の面かげ

03 水煙る深山の氷ひま見えて

《解釈》冬の間は氷に閉ざされていた深山の水も、春になって融けはじめ、それが春の日差しをうけて、水蒸気となって立ち昇っている。遠くの花々はほんのりとうすく霞んで見えるが、あのあたりにあつた雪は、今はもう見えない。

※「水が煙る」とは要するに水蒸気が立つこと。連歌では「水煙る江に船かへる見ゆ」（長享二年正月一日「何木」四八）などと好まれるものであるが、勅撰集には例が見出されない。ただし『草根集』には「氷とく山下水に立つ煙のぼるも霞む朝日影かな」（二五九）など多数詠まれている。第二句の「霞に近き」と同じことが言える。

水煙る深山の氷ひま見えて

04 夕風あらし川づらの里

《解釈》冬の間は氷に閉ざされていた深山の水も融けはじめ、この川に面した里では、それが春の日差しをうけて、水蒸気となって立ち昇っている。それでも、春はまだ浅く、夕方になると風は荒くなる。

夕風あらし川づらの里

05 芦そよぐかげに小船やとまるらむ

《解釈》川に面した里。夕方になって風が荒くなつて、汀の芦が激しくそよいでいる。私を乗せた小船は、今宵、その陰に停泊して一夜を過ごすのだろう。

※「風」に「そよぐ」が寄合。先例は「月残る入江の松に風おちて／秋ゆく道にそよぐ萩原」（寛正六年十二月十四日「何船」三／四）など。ただし、「風」に「そよぐ」と付けるのは、所謂「用付」で、後の連歌では好まれない。

※「萱草」に入集（伊地知本一一二四）。『老葉』に入集（宗訓筆本七五八、愚句老葉八五九）。『愚句老葉』自注に「やす／＼とある句ながら、河づらの旅泊おもひやり給ふべし」と見える。的確な指摘である。

芦そよぐかげに小船やとまるらむ

06 かゝれば露をはらふ旅人

《解釈》旅人を乗せた船が芦原の陰に見え隠れする。多分、そこに停泊しようとしているのであろう。芦が風にそよぐたびに、葉の上に置かれた露が袖に降りかかるので、旅人はその度にそれをうち払うのだ。

かゝれば露をはらふ旅人

07 鳴く虫の心しらるゝ野辺に寝て

《解釈》秋の野に一夜の宿りをとる。鳴く虫の声が聞こえる。虫よ、お前も寂しくて鳴いているのか。旅人は袖に降りかかった露を払う。それは、秋の夜の夜露なのだろうか、それとも、旅人のこぼした涙なのだろうか。

※「鳴く虫の心しらるゝ」という表現、いかにも悉皆有情の宗祇の世界と言えよう。

「かゝれば露をはらふ旅人／色／＼の秋の虫鳴く野辺に寝て」などとするのとは大差である。

※「露」に「虫」が寄合。先例は「も／＼さの数を尽くして置く露に／鳴く音もすこし虫の声／」（応永二十七年五月二十五日「何路」二九／三〇）など。証歌は「秋の夜は露こそことに寒からし草むら／＼ことに虫のわぶれば」（古今・四一九九）など。

鳴く虫の心しらるゝ野辺に寝て

08 枕すさまじ更けやはつらむ

《解釈》秋の野に一夜の宿りをとる。鳴く虫の声が聞こえる。虫よ、お前も寂しくて鳴いているのか。私も寂しくて仕方がないのだ。あたりは余りにも荒涼とした雰囲気、中々眠ることができない。もう真夜中になったのだろうか。

※「寝」に「枕」が寄合。先例は「寝るほどもなくてや旅はいそぐらむ／枕むなしき船のかぢ音」（初瀬千句・第五「何木」七／八）など。証歌の必要はあるまい。

枕すさまじ更けやはつらむ

09 ゆく月も遠き砧の残る夜に

《解釈》秋の夜、遠くで砧の音がする。眠ろうとしても、余りに荒涼とした雰囲気、寝付くことができない。月は大空を行く。もう真夜中だろうか。砧の声はまだ止まない。

※「遠き砧の残る夜」というレトリック、絶品と評すべきであろう。同じように「月」と「砧」とを詠んでも「待ち出づる月に砧の音添ひて」（文禄三年三月四日「何衣」九二）など、決してマズい句ではないが、やはりレベルが違う。

ゆく月も遠き砧の残る夜に

10 つらき風とふ山もとの庵

《解釈》秋の山もとの庵。遠くから砧の音が聞こえる。訪れるのは寂しさを募らせる風ばかり。眠ろうとしても寝付くことができない。月は大空を行く。砧の声はまだ止まない。

つらき風とふ山もとの庵

11 老木こそなほ我が友と松を見て

《解釈》秋の山本の庵。世間から捨てられた私を訪れるのは、寂しさを募らせる風ばかり。そんな私の気持ちを知ってくれているのは、やはり年老いたこの松の木だけだろう。

老木こそなほ我が友と松を見て

12 朽ちずはいと身をいかにせむ

《解釈》年老い、世間から捨てられた私の気持ちを知ってくれているのは、やはり同じように年老いたこの松の木だけだ。今さら何の望みもない。早く死んでしまいたいと思う。これ以上生きながらえても、我が身をどうしようという思いがつのばかりだ。

宗祇独吟「月の秋」百韻注解

勢田 勝郭

Commentary of Tsukinoaki - Hyakuin

Katsuhiko SETA

宗祇の独吟連歌中、初期の傑作と称される「月の秋花の春立つ朝かな」を発句とする百韻に対し、現在の研究レベルに則った注解を提供する。

本稿が取り扱う連歌は、宗祇が応仁二年（または文明二年）正月一日に詠じたと思われる独吟百韻である（両角倉一氏『連歌師宗祇の伝記的研究』二二五ページ）。それが宗祇初期の傑作であることは、その中の一句が、自撰句集『萱草』『老葉』の諸本に入集しているという事実をあげるだけで、もう十分であろう。本稿は、それについて、今日の研究レベルに則した注解を提供しようとするものである。

テキストは、江藤保定氏『宗祇の研究』資料編所載のものを基礎とし、諸本と校合して、仕立・付合・去嫌の面でもっとも問題がないと思われるものを設定して用いた。ただし、紙幅の都合上、その設定の過程について具体的に述べることは省略せざるを得なかった。また、寄合の指摘も連歌の注解では重要であるが、これも必要最小限とした。去嫌については、末尾に一覧表の形で示すこととした。それについては、拙稿「連歌去嫌の総合的再検討」（奈良工業高等専門学校「研究紀要」第五二号）を参照していただきたい。ネット上で見ることができる。一覧表の「凡例」も、そこに譲る。以上、各点、了解されたい。

応仁二年正月一日

賦何人連歌

01 月の秋花の春立つあしたかな

《解釈》秋には月を愛で、春には花を愛でる。そんな折節ごとの情趣に満ちた一年が、また、この朝から始まるのだ。

※賦物は「何人」。句中の「月」により「月人」と賦される。

※応仁二年正月一日の詠。他に文明二年正月一日の詠とする伝本もある。本稿では現在の多数説に従い応仁二年説を用いるが、第四二句を参照されたい。

※『萱草』に入集（伊地知本一）。『老葉』に入集（宗訊筆本一六〇三、毛利本一五五九、筑波大学本一五四三）。『自然斎発句』に入集（岩波文庫本一）。

月の秋花の春立つあしたかな

02 霞に近き雪の面かげ

《解釈》秋には月を愛で、春には花を愛でる。そんな折節ごとの情趣に満ちた一年が、またこの朝から始まる。山々はほんのりと薄霞んで見えるが、あのあたりは、冬の間は白く雪が積もっていたのだ。

※「霞に近き」というレトリックは、勅撰集には見えず、調査の範囲で「道のべをへだつるほどは見えわかで霞に近き遠の里人」（草根集・三六〇）が検出された唯一の例。ただし、連歌では「山里の霞に近く庵しめて」（太神宮法楽千句・第二「何木」七三）などと用いられている。連歌と冷泉派の和歌との親近性を示唆する事象であ

奈良工業高等専門学校 研究紀要第58号

令和5年2月

編集兼
発行者

奈良工業高等専門学校
大和郡山市矢田町22

RESEARCH REPORTS

ISSN 0387-1150

NATIONAL INSTITUTE OF TECHNOLOGY (KOSEN), Nara College

NO. 58, 2022
CONTENTS

Papers

Commentary of Tsukinoaki - Hyakuin.....Katsuhiro SETA 1